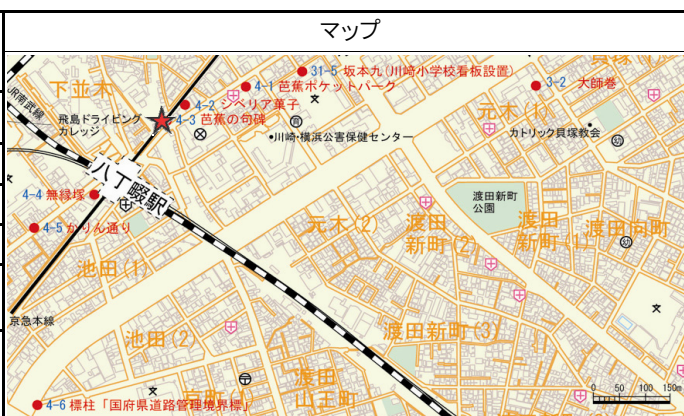


かわさき区の宝物シート

宝物No.	ばしょうのくひ 芭蕉の句碑		
4-3			
エリア	中央地区	シーズン	通年
	八丁畷	日時	
目的	<input checked="" type="checkbox"/> 観る <input type="checkbox"/> 遊ぶ・体験する <input type="checkbox"/> 食べる <input type="checkbox"/> その他		
宝物定義	<input type="checkbox"/> ものづくり <input type="checkbox"/> イベント・祭り <input type="checkbox"/> 味づくり <input type="checkbox"/> にぎわい <input type="checkbox"/> 現代の文化的なもの <input type="checkbox"/> 港めぐり <input checked="" type="checkbox"/> 歴史的なもの <input checked="" type="checkbox"/> 人物		



所在地	川崎区日進町11-9
問い合わせ	川崎市教育委員会生涯学習部 文化財課
TEL	044-200-3305
FAX	044-200-3756
E-mail	
URL	http://www.city.kawasaki.jp/88/88bunka/home/top/stop/dokuhon/t0100.htm (川崎市内文化財案内/芭蕉の句碑)
交通	JR・京急八丁畷駅より徒歩1分



基礎情報

- 『麦の穂を たよりにつかむ 別れかな』 元禄7年(1694)5月、故郷伊賀に向かった松尾芭蕉は、見送りにきた弟子たちと川崎宿のはずれ(京口)近くの茶屋で別れを惜しみ詠んだ句である。俳聖・松尾芭蕉の足跡をのしるした句碑で、文政13年(1830)俳人一種によって建立された。
- 川崎市内には5基(他に稲毛神社、川崎大師平間寺、高津区の宗隆寺、宮前区の影向寺)、県内では60基を超える数多くの芭蕉の句碑があるが実際に句を詠んだ地に建てられた碑は少なく大変貴重なものとされる。江戸時代の川崎宿を偲ばせる最も記念すべき遺産の一つである。

由来・エピソード

- 松尾芭蕉は、正保元年(1644)伊賀上野(三重県)の生まれ。江戸に下り、深川の芭蕉庵に住んでいた。元禄7年、芭蕉が江戸から故郷へと旅立つ際に、弟子たちは芭蕉とともに六郷川(多摩川)を渡り、川崎宿に入った。なかなか別れを告げられない一行はついに京口(京都側の宿場の入り口)までさしかかってしまった。そして腰掛茶屋で別れを惜しみながら句を詠み合ったとされる。
- 弟子たちの詠んだ句に対して芭蕉が返したのがこの句である。芭蕉はこの年の秋に大阪で帰らぬ人となり、弟子たちにとってはこの場所が本当に最後の別れとなったのである。句碑は元々京口付近に建てられたが数度の移動を経て現在の場所に落ち着いたという。
- 句碑の周囲には色とりどりの花々が植えられ季節ごとに通行人の目を楽しませている。日頃の維持管理は日進町町内会「芭蕉の碑保存会」によって毎月10日・20日・30日と定期的な清掃や植栽の手入れなどが行われている。往時の風情を感じてもらおうと毎年「麦」の種播きも熱心に続けられている。
- 平成16年(2004)にリニューアルされた日進町町内会館は芭蕉の句碑にちなみ「麦の郷」と名づけられ、会館の前には江戸時代の川崎宿の姿が描かれた「東海道分間延絵図」の銅版が設置されている。銅版は昭和40年代に日進町町内会婦人会が市教育委員会の協力を得て作製したもので、会館の建替えの際に倉庫内から発見されたという。

補足・その他

- 京口付近には平成17年(2005)に「芭蕉ポケットパーク」が整備され、弟子達の詠んだ句が記された石盤が置かれている。
- 稲毛神社の参道脇にも平成6年(1994)10月、芭蕉没後300年を記念した芭蕉の句碑が建てられている。

関連シート

- (1-1)川崎宿
- (1-14)稲毛神社
- (4-1)芭蕉ポケットパーク